




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2816 号	氏名	杉山 元
審査担当者	主査	八木 美	
	副主査	中島 収	
	副主査	内田 政史	
主論文題目： Evaluation of endoscopic biliary stenting for obstructive jaundice caused by hepatocellular carcinoma (肝細胞癌に併発した閉塞性黄疸に対する内視鏡的胆管ドレナージ術の検討)			

審査結果の要旨 (意見)

肝細胞癌に対する画像診断、治療の進歩により長期生存が認められるようになり、様々な合併症も認められるようになった。肝細胞癌の胆管浸潤は進行した状態で併発する比較的稀な合併症であり、閉塞性黄疸を発症すると治療に難渋し、予後不良となる事が知られている。今回の研究は肝細胞癌に併発した閉塞性黄疸に対する内視鏡的胆管ドレナージ術の成績について検討している。ドレナージ手技の成功率は高く、第一選択として推奨され、ドレナージ効果が認められれば、追加治療も可能となり生存期間の延長に繋がる事が示唆された意義のある論文であり、学位申請に値するものと判断された。

論文要旨

近年肝細胞癌(HCC)に対する診断および治療法の進歩により、早期発見および長期生存例が増加しているが、経過中に閉塞性黄疸を併発した場合、治療に難渋し予後不良となる事も少なくない。近年は QOL を重要視して内視鏡的胆道ステント留置術(EBS)を第一選択とすることが増えている。今回当院で経験した HCC に併発した閉塞性黄疸に対する EBS の治療成績を明らかとし、EBS の有用性と問題点を retrospective に検討した。対象は 2003 年から 2012 年まで当院で肝細胞癌に閉塞性黄疸を発症し減黄処置を行った症例で、初回治療として EBS を施行した 36 例を検討対象とした。初回の留置手技成功率は 100% と高く、早期合併症も認めなかった。減黄有効群では肝切除歴がない症例 ($P=0.002$)、multiple-stenting 症例 ($P=0.036$) が統計学的有意差をもって多かった。減黄無効群では全例で HCC の治療が実施する事が出来なかったのに対し、有効群では減黄後に 27 例中 12 例で、治療可能となった。有効群、無効群の MST はそれぞれ 150 日、22 日であり、両群間に統計学的有意差 ($P<0.0001$) を認めた HCC に併発した閉塞性黄疸に対し積極的な EBS は第一選択として推奨され、予後の延長に寄与すると考えられた。HCC に併発した閉塞性黄疸は複雑な病態を呈しているため、今後の更なる症例の蓄積が必要である。